

# 岡崎むかし館 はえとりの道具



かつてほど見られなくなりましたが、わたしたちの生活を悩ます身近な生き物「ハエ」。もちろん今でも、大きなハエが家の中に入ってきたり、台所の残飯入れの周りにショウジョウバエの姿を見かけたりすることはあるでしょう。しかし現在のような公衆衛生がまだ未整備で、農村では牛やニワトリを飼う農家があちこちで見られた時代、ハエはごくごく身近な存在でした。家畜やそのフンなどにたかっては、家に入ってきて、食べ物にまでたかるので、もっぱら嫌われ者でしたが…。もちろん蚊取り線香ぐらいでは死なないので、撃退するためにいろいろな道具が工夫されました。

今では見かけなくなったはえとりの道具3点と、ちょっとユニークな1点を紹介します。

## はえとりがみ 蠅取紙



岡崎市立中央図書館 蔵

粘着性のある薬品を塗った紙でハエを捕まえます。明治時代に「フライキャッチャー」の名で輸入され、大正12年に国産化されました。当初は大型のハエを捕獲する平紙タイプが主流でしたが、昭和初期に小型ハエ用としてリボン状で天井から吊るすタイプのものが開発されました。

## はえとりき 蠅取器 (据え置きタイプ)

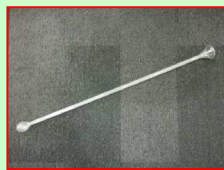


岡崎市立中央図書館 蔵

ガラス製で、上部の口は栓をすることができます。底部は中央が内側に湾曲して立ち上がり、大きな穴が開いています。また短い脚が3つついて、置くと隙間ができるようになっています。

底部の溝に米の研ぎ汁や塩水を入れ、下に皿や広げた紙を置いて砂糖などを載せておきます。するとハエが寄ってきて中に入り、出口を探しているうちに溝に落ちて溺れ死んでしまう、という仕掛けです。

## はえとりき 蠅取器 (管状タイプ)



岡崎市立中央図書館 蔵

ガラス製で、細長い管の一方にラッパ状の口、もう一方に袋状の溜まりがついています。溜まりに水を入れておき、天井にとまっているハエをラッパの口を近づけて閉じ込めます。逃げ場を失ったハエが管をつたって底の溜まりに落ちてしまう、という仕掛けです。

時代を経て、プラスチック製のものも作られました。

## じどうはえとりき 自動蠅取器「ハイトリック」



岡崎市立中央図書館 蔵

大正時代に名古屋の時計メーカー（尾張時計株式会社 現尾張精機株式会社）が開発した、ゼンマイ仕掛けでハエを捕る器械です。使い方は、四角い柱状の板に酒や酢に砂糖を混ぜたものを塗って、ゼンマイでモーターを回転させるだけです。甘い匂いにさそわれたハエがとまっているうちに、板がゆっくり回転していきます。ハエは気づかないまま箱の下に閉じ込められ、中の網目の箱に行き着いて出られなくなる、という仕掛けです。

調度品のような模様や、オルゴールのようなゆったりした動きなど、蠅取りというイメージを感じさせない、どこか優雅な雰囲気さえ漂ってくる道具です。